罪扉 -Irreplaceable replacement-

黒咲彼岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪扉　－Ｉｒｒｅｐｌａｃｅａｂｌｅ　ｒｅｐｌａｃｅｍｅｎｔ－

【Ｎコード】
Ｎ２５６０Ｋ

【作者名】
黒咲彼岸

【あらすじ】
誰にも罪などなかった日々の結末。
切望の先に見る、小さすぎる幸せの名残。
――――あんなに近かったのに、こんなにも遠かった。
それは、いずれ忘れられる、どうしようもなかった物語。

Please, please, call me...! —side B—

インターホン。
泥のようにだらんと横になっていた体をもたげる。
まだ眠たい目をこじ開けるように擦った。
体中が痛くて熱くて、もう本当にボロボロで。
体を満たすどうしようもないほどの疲労感。
音が鳴る鳴る響いてる。
それをずっと待っていて、けれど私には遠すぎて。
幸せなほどの呼び出しに、心は蕩(とろ)けてしまいそう。
あぁ、うん、待って、すぐ開ける。

Replaceable Heart

「こーちゃん、こーちゃん…？」
ゴールデンウィーク明けで、学校に登校して早々眠気に降伏してしまった思考に、そんな声がかけられた。
机に伏せていた頭を持ち上げてみると、逢川要（アイカワ カナメ）ことカナがそこにいる。
「朝っぱらからそんな眠そうにしてるなんてさ…。連休中に羽を伸ばしすぎだよ」
漆喰という表現が似合う黒髪を肩に触れる程度伸ばし、琥珀色の瞳を大きく開いているこの古くからの友人は、しかしいつ見ても女っぽい。
男子の制服を着てなければ、普通に女子で通るのではないだろうか？いや、女子生徒がおふざけで男子から制服を借りている…と言った方がしっくりくる気がする。
「まぁなぁ…。ホントよーすけと遊びに行きすぎたよ。
…てか、そのこーちゃん言うのやめてくれ。前から言ってるけどよ、高校生にもなってそれはキツイ」
それは断る、などと笑いながら断言して、カナは俺の隣の席の椅子を引いた。
それから、わざわざ椅子の足を1本を残し浮かせて、その上に絶妙なバランスで正座する。
相変わらずな運動能力、いやバランス能力だ。
わざとバランスの悪い座り方で座るというのが最近のカナの流行らしいのだけど、正直そんな馬鹿な行為で楽しめるのはこいつの能力の高さがあってのことだろう。
カナとは小学校の頃からの付き合いになるが、こいつはその当時からオールマイティーな才能の持ち主なのだ。
オールマイティーな才能とは、何か1つの分野に長けているとい

うヌルイものではなく、”何でも卒なくこなす”という実に厄介なモノの事を指す。
跳び抜けて1番ではない代わりに、俺のような人間が幾らがんばって成果を出してもそのさらに上に存在するという、無敵なステータスを持っているわけだ。
誤解を恐れずに言うならば完璧超人、とでも言えばいいのだろうか。とにかく何でも凡人よりできて、それが普通、そんな奴。
この俺、辰田幸平（タツタコウヘイ）にもその才能を分けてもらいたいものだ。
寝ぼけた頭で、鼻歌交じりにバランスゲームを楽しんでいる奇怪な友人の紹介文を考えてみるものの、そんな紹介文句が使用されることがあるかは目下不明。
「ん、そうだ。こーちゃんには言ったっけ？」
しばらくバランスをわざと崩しグラグラと椅子を揺らして楽しんでいたカナが、思い出したように話しかけてきた。
「何を？」
「僕の姉様がついに挙式を上げってコト」
…は？今こいつさらりととんでもない事を言ってくれたぞ？
「……聞いてないな。彼氏がいたことすら知らなかったし」
平静を装うも、失敗したっぽい。カナはくくっといやらしい笑みを浮かべて俺を見ている。
うわぁ、なんていう趣味の悪い報告（サプライズ）の仕方だ。
カナの姉様・・・永歌（エイカ）さんは実は俺の初恋の人なのだ。というか今でも…まぁ……その…。
今のカナを大人っぽくした感じの人で、それでいて性格はカナの数倍いい。
というか、カナは見ての通りの意地悪だしな。無論、単なるからかいのつもりなんだろうが。
基本優しいいい奴なんだけど、時折こういう恐ろしい事をしてくれる・・・。
「親にも隠していたからねぇ。僕もびっくりだったんだよ。

…しかし、これで現在家にいるのは僕を含めて3人だけになってしまったワケ」
「永歌さんも結婚して実家を出て…ああ、兄貴は大学で春からいないんだっけ？」
永次（エイジ）というカナの兄は、これまたこいつに似ている。
ただ、今度の似ているというのは学才の事で、何とこの春永次さんは東京の国立大学に合格なされた。カナもそこを狙っているらしいのだが、おそらく合格するんだろう。
困った奴だ。そんな天才の横にいる身になってくれ。マジで。
「兄様は一人暮らし始めて、彼女まで作ってしまうし…全く、ここ最近は色々あって目が回るよ」
なるほど、確かにカナの周りの環境はかなり変わったらしい。仲がいい兄弟だったし、なんだかんだで寂しいのだろう。そこら辺俺にはよく分からない感情だが。
いや、しかし…、
「彼女かぁ…いいよな、俺も欲しい」
「そんなに欲しいなら要になってもらえばいいんだ」
と、そこでそんな恐ろしい横槍を入れてくれる人物が新たに登場。
声のした方を振り向くと、大塚陽介（オオツカ ヨウスケ）、通称よーすけが指定カバンを自分の机に下ろしていた。
今学期から同じクラスになって仲がよくなったのだが、気さくで絡みやすい奴だ。
運動部というわけでもないが、がっちりした体で硬派という感じの性格をしている。
「で、何の話だったんだ？青春？」
「いや、カナの姉と兄の話だ。結婚したんだとよ、姉が」
「何！？それはめでたいな。おめでとう」
「僕に言われても困るんだけど…まぁ、ありがとう」
「で、兄の方が彼女を作ったらしい」
「何ぃ！それはけしからんな！」

「…さっきと反応が違うよ？」
「女が幸せになるというのは実に祝福する気分になるんだけな。男の場合は腹が立つ」
「そんなフェミニズムな…」
「俺は分かる気がするけどな」
よーすけに同意する俺。ただ1人、カナは分からないらしく首を傾げている。
まぁ、それよりも今気にすべきは…、
「けどよ、冗談でもよしてくれ」
「ん？」
「カナを彼女に云々…」
「何で？」
その言葉がカナが男であることを重々承知した上での発現なら問題があり過ぎだが、これまたカナと一緒でからかい半分なのだろう。
しかしながら、俺にとってはかなり切実な話なのだ。
「……中学校の頃な、授業中も休み時間中もノートに向かって黙々と何かを書き続ける女子が居たんだ」
いきなりの語りによーすけは怪訝な顔をしているが、続ければその真意は分かる。分かるから静聴しろ。
「ある日、それを見ていたクラスの問題児君がそのノートを取り上げて大声で読み始めた」
突然の行動に、呆気に取られていたその女子生徒だったが、すぐさまその内容が知られることの重大さに気がついて大声で喚いていたっけ。
最後の方なんて泣き叫んでたけど、それも当然ではあったわけだ。
「で、その内容は？」
薄々気づいている風だが、皆まで言わせる気か。
「俺とカナのＢＬ小説」
そう。彼女の書いていた文章のあまりにな表現に、俺は人生からそういう要素を徹底的に排除することを誓ったのだ。

あれはもはや精神性爆撃兵器のレベルだった。
思春期真っ盛りだったせいか、規制というものを完全に取り払った、自重の欠片もない代物で脳を汚染されてしまい、トラウマというモノを人生初めて負った瞬間である。
「うわぁ、ひでぇなその男子！」
「いや、食いつく所そこ！？」
「だってよ、どう考えてもそいつが悪いだろ。
別段、その女子が直接コーヘイに害を与えたわけじゃないし、何を思うも個人の自由だぜ？フリーダム万歳」
「よーすけはあの文章の恐ろしさを知らないからそんなことが言えるんだ」
「そうか？」
「その上よぉ、カナが朗読しやがった男子からそのノートを奪い取ってなんて言ったと思う？」
「想像もつかないが、さぞ面白いことだろうな」
「そのノートをじっくり読んで、『文章表現としては面白いね。描写もしっかりしていて読み応えがある』だとよ」
それを聞いてよーすけは爆笑だ。
「ぷはっ、あはははははっ！！」
「笑い話じゃねぇ。否定すればいいのにそんなこと言うから、そういう目で見られるようになったんだぞ！」
と、ここで今まで俺の喋るのを聞いていたカナから反論がきた。
「あのねぇ、こーちゃん？そうしなかったら、あの子クラスでさらし者だったじゃない。
ああやって皆の関心を僕に持っていったからあの子はそこまで糾弾されずに済んだんだよ？」
「ええっ、あれそういう意図だったのか！？」
「いくら僕でもあそこで天然ボケできるスキルは持ってないよ…」
むぅ。思った以上に気を使っていたらしい。
けど、カナは天然だ。そこだけは譲れない。

この親友は昔からとんでもないことをやらかしてくれたものなのだ。
ある時は自転車と同じようにいくとでも思ったのか、一輪車で坂道を下る際にペダルから足を離したり。…その結果、サドル部分が後に傾いて後頭部を派手に打ったのは言わなくても想像できるだろう。
またある時は俺が土産で買ってきたブーメランを木に投げつけて、蝉を真っ二つに切り落としたり。・・・落ちたそれを、切断面がくっつくように木に止まらせて『直った』とかもはやホラーな逸話だ。
うん、天然というかちょっと怖い話になったよな。…まぁいいか。
前によーすけにも話したそんな話はいいとして、
「そういうわけだ」
だから俺とカナをそっち系で弄るんじゃねぇ。
「あはははは、そりゃ災難だな。
でもまっ、それは置いといて…要の姉と兄ってどんな人なんだ？」
ひどい奴だ。俺のトラウマ話を聞くだけ聞いて”それは置いとい
て”ときた。いや、語り出したのは俺なんだけど。
「姉様は永歌って名前で大学2年生。スーツの似合うタイトな人だよ。で、兄様は永次、大学1年生。茶髪の遊び人かな」
「へぇ…？」
「よーすけ、カナの言うことを信じるなよ。その茶髪の遊び人な兄貴は国立大行ってるからな」
よーすけはその言葉を聞いて、ゆっくり首を傾け始めた。それが限界まで達すると、折り返して元に戻っていく。
「遊び人…？」
「カナの基準がおかしいんだ」
その言葉にぷぅっと頬を膨らますカナ。
失礼な、という意思表示なのだろう、きっと。
ただ、こいつがおかしいことは明白だ。
「ちなみに姉様はこーちゃんの初恋の人です」

…まさかの報復がきた。
カナよ、それは言ってはいけない事柄ですぞ！
「…なるほど、それは是非見てみたいものだな」
それに食いつくよーすけ。さらにカナも応じる。
「写真ならあるよ」
そう言って、カナは財布の定期入れのポケットに入れられた写真を見せた。家族の集合写真といった感じの、正しく一家団欒なものだ。中央に子供達を寄せて、それを両親が両脇から挟んでいる。
私服までスーツなスレンダーな永歌さんに、ラフな格好をしている茶髪の永次さん。さらにその横にYシャツを適当に着流しているのがカナだ。
「はぁー、綺麗な姉さんだな。要に良く似てるし」
「うーん、血は繋がってないんだけどね」
「あぇ？そうなのか？」
「うん。ほら、姉様と兄様の名前、永歌と永次って両方永遠の”永”がつくんだけど、それって父様の永助（エイスケ）って名前から取ってるんだよ」
「あぁ、なるほど。要だけが”永”が入ってないもんな。上2人は父親の連れ子か」
「そう。それで僕は母親の連れ子」
補足すれば、カナの母親は静菜（シズナ）という名前らしい。
バツイチ同士の、お互い子供を連れての結婚だ。傍目ややこしい事情がありそうな話なのだけど、逢川家は羨ましいほど仲がよかったりする。
俺なんかは親父のことが憎くて仕方ないというのに、ホントなんでこうも違うのだろうと思うことがしばしばある。
「しかしいい集合写真だよな、それ。撮ったの最近だろ？俺やコーヘイみたいなのは、今じゃ家族で写真なんて撮れはしないだろうな」
「まぁな。恥ずかしいし、親父と同じ空間に閉じ込められる写真なんて撮りたくもない」

「駄目だよこーちゃん、そんなこと言っちゃあ」
何の躊躇いなく当然のように窘(たしな)められるカナはやっぱり”いい子”なんだろう。
カナ、お前はそのままのいい子で育っておくれ。
「俺にも姉がいるが、正直あんまり仲良くないなぁ」
「あれ？そうなのか？」
よーすけはうむ、と頷く。
その様子が何か重大な決心を下す年配者のように見えて面白い。
「少なくても肩を並べて立てるほど仲は良くない。まぁ、姉弟(きょうだい)とはいえ思春期だしな」
「カナぐらい童顔だったらともかく、よーすけみたいなゴツイ弟じゃあな…」
「失礼な奴だな。お前だってユルヘタレなモヤシ野郎じゃねーかよ」
「残念ながら俺に兄弟はいないのだよ、よーすけ氏」
だから幾らユルくてヘタレでモヤシだろうが関係ない。
それによーすけだってアパートで1人暮らしなのだから、姉との確執云々なんて日常生活になんら関わりないだろうに。
「そして何気に僕にも失礼だよね。童顔のつもりはないんだけど？」
「童顔じゃなかったら女顔だな」
そう言ったら頭を叩かれた。
しかし…この一連の会話中ずっと椅子バランスをよく継続できるものだ。集中力が切れたりしないのだろうか？
と、そこで昨日の夜に立てた予定が頭に浮かび上がってくる。そうだ、学校にきたら訊こうと思っていた事があったのだ。
「2人共明日の放課後暇か？」
「うん？まぁ、時間は空いてるよ」
「俺も大丈夫っちゃあ大丈夫だな」
「何？何かするの？」
「ん、ゴールデンウィークの延長でもと思って」

□□

五月病と呼ばれる、どう考えても患者の精神力に依存した同情の余地なしな病気(だるさ)に苦しみながら授業を処理した学校終わり、俺達はショッピングモールの入り口で待ち合わせをしていた。

別に制服のままでもよかったのだが、どうも制服というのは堅苦しいし、何より”遊びに来ている”という演出上に邪魔な物だ。

軽い買い物のつもりではあるものの、開放感というのは大切だと思う。

家に帰って制服を脱いだついでにシャワーで軽く汗を流してから家を出る。待ち合わせ場所に到着すると、既に2人は待っていた。

ラフな格好だが2人も当然私服だ。俺は目に留まるといつも思うのだが、制服でうろつく連中の気が知れない。所属をバラすような行為を彼らはどう考えているのだろう？

と、まぁ話が逸れた。

2人の服装はよーすけは制服とあまり変わらないYシャツとGパンでカナは長袖のTシャツにハーフパンツだ。

もちろん俺も普段着で、特別挙げるようなものでもない。

改めて見て、やっぱり着飾りというものをまるで意識していないなぁと確認。

うん、だからこそ丁度いい。

「じゃあとりあえず2階に行くか」

俺達の行く先。2階フロア、衣服専門。

高校生にもなってファッションに全く気をかけないというのもどうかと常々思っていたのだが、まぁ、その・・・1人で行くのも気恥ずかしかったのだ。

この機会に同じく服装に気を使っていないゆーすけと流行どころか世間というものを無視しているカナを巻き込んでみようと思ったのだが、その思惑は成功しているとみていいだろう。

1人だけじゃないっていうのは、何でこうも安心感があるのかね。

「しかし、服というのは何で高いんだろうな？」
エスカレーターに乗った所でよーすけが言う割には興味のない感じで呟く。確かに、たかが布の縫い合わせが数千円するのは俺には理解不能な事柄だ。
「まぁ、いいだろそういうのも。最近ここにも安いチェーン店舗が入ったらしいし」
「そうらしいね。まぁ、僕は姉様兄様から買って貰ったりするのがほとんどだけど」
だからあんまり服に配慮したことないんだよね、とカナ。
こいつらしいといえばこいつらしい事情だ。
「ホンット仲がいいよな…」
ほとほと感心するよ。
そうこうしているうちにエスカレーターは2階の高さに達している。
2階フロアに足をつけると。普段全く見慣れていない衣服を扱った店舗が並んでいるのがよく分かる。
「改めて気圧されそうな俺はヘタレか？」
「ヘタレ同士で行けば怖くない、はずだ」
とりあえずは端の一店から、選んでみるか。

「これなんてどうよ？」
ゆーすけがチャラチャラとした金属が付属しているズボンを取り出してきた。
電気を使う料理を出される時に倦厭されそうな感じだ。ああ、そんなレストランに着ていかないか。
しかし…俺にはその良さが全くわからないのだが。
「動きにくそーだな。何かもっとシンプルなのとかないのかねぇ」
「コーヘイよ、わざわざ買いに出てきてシンプル且つ無地のモノものを求めてどうするってんだ。

何かこう…外に出てそこそこ身なりを整えてるように見えるのを探してるんだろ？」
そうなのだけれども。
そもそも上下どう合わせれば違和感なくコーディネートできるかさえ分かっていない俺には服選びなんて高等テクニックは到底不可能な気がしてきた。
「こーちゃん、これは？」
そう言ってカナが持ってきたのはダッフルコート。
今の季節は春だしこれからやってくるのは夏だ。だいたいそれじゃあコーディネートもへったくれもない。というより、季節を外れたものを置いているのは経営姿勢として駄目だろうよ。
そしてそれを選ぶカナのタチが一番悪い。わざとかあるいは単に好みなのかは知らないが同じようなものだ。
そんな調子で積極的に選べない俺に代わって、的外れなものを勧めてくれる2人に振り回される事小一時間。やっと見通しが立った。
持ち数の少なかった無難なシャツとズボンを数点に冒険の意味を込めてよーすけやカナが選んだモノをひとつずつ。
それらを買った時には既にかなり疲れが来ていた。終わりの見えないまま立ち続け歩き回ったのだから当然といえば当然だ。
疲労困憊。精神的疲労に身体的疲労が二重に合わさって、もう何もしたくない、そんな感じ。
しかし、実のところもう1つやってやろうと思っていた事があるわけで、それをやるまでは休めないのだ。
1つの目論見、この機会にせっかくだからやっておきたい。
「うん、ここだ」
カナを引っ張る形で3人がやってきた場所。
「こーちゃんが何を考えているのか分からないでもないけれど、ちょっと待って。いや、大分待って？」
それは同じく2階フロアにある店舗の1つだ。
ただし、女性服専門店。

「さぁ行ってらっしゃい」
カナを無理やり押し込んで俺とよーすけは出入り口で待つ。
入った所で何度かチラチラこっちを見てきたのだが、俺がこういう時に退いた例(ためし)がないことを重々理解しているカナは、諦めたらしくとりあえずといった風に奥に進んでいった。
これは俺からのささやかな意地悪(プレゼント)だ。さぁ、がんばって選んでくれ。…女性服を。
「…要に女っぽくさせてどうすんだ？余計勘違いされるんじゃないのか？」
よーすけが尤もな意見を唱える。
しかし、しかしだ。俺だってそこら辺は考慮済みなのだ。
「考えてもみろ。学校と違って外では事情を知らない奴が大半なんだぞ？むしろあのどっちつかずの服の方が怪しいんだ。
女として認識されて隣にいると思われるのと、男なのに女装して隣にいると思われるのとじゃ天地の差がある」
いっそのこと外では完璧に女としていてもらった方が無難なのだということに最近気がついたのだった。
そんな簡単な事に今まで気づかなかった時点で俺の頭の良し悪しは露呈しているようなものだけど、頭の悪さより趣味の異常さの方が世間の風当たりが強い御時世なのだ。
まぁ今更俺自身が女として意識することなんて有り得ないし、だいたいカナにもそんな気はないだろうが、俺の精神衛生上その方が望ましいには違いない。
「仮に外でクラスメートと偶然会ったらどうすんだよ？ただの変態だぞ」
うっ！それは…考えてなかった。いやでも、俺とカナが仲がいいっていうのは既に周知の事実なわけで、たまたまカナが女装してようがカナの趣味と取ってくれる……というのは希望的観測だなやっぱり。
「じ、じゃあ俺はどうしたらいいんだ…」

「知らねぇよ。……しかし…前々から思ってたんだが、要の容姿はナチュラルなんだよな？」
と、何故かいきなりトーンを落として尋ねてきた。お気楽話から真剣なものに切り替えたつもりなのだろうが、そもそもそうしなければならないような話題だろうか？
「女っぽいってトコか？それなら昔からあんな感じだぞ？」
少し伸びた後ろ髪をした少年。出会った当時はそんな印象を持った記憶がある。
子供の頃なんてものは男女の身体的特徴なんて局部くらいのもので、何も違和感がなかったのだけど、まさかそのまま育つとは思ってもみなかったな。
「昔からねぇ…それだったら中性っぽいって表現が正しいだろうよ。けど、要を見る限り俺は中性よりも女っぽいという印象を受けるな」
「…まさかと思うけどよ、カナに欲情してます？」
茶化すつもりで言った質問だったのだが、
「してる」
意外なほどしっかりとした答えが返ってきた。
「……ッ！えっ？ちょっ！おい！」
「勘違いするなよ？要が好きだとかそういう事じゃない。『思春期の男子高校生として、逢川要は性的興奮を起こさせる』って言ってるんだ」
それもそれですごく衝撃的な発言な気がする。
ていうか何だその生々しい台詞。
「つまり、それほどに女っぽい、女らしいってことだ」
「それは分かったって…。で？」
「いや・・・だからてわけじゃないんだが、何かワケありなのかなって思っただけだ。俺、正直要と仲良くないからなぁ」
「そうか？普通に話してるだろ？」
「コーヘイは鈍感すぎる。いつかそれで人を傷つけるぞ…。
喋れるから仲が良いってわけじゃないだろうが。お互いなんか距

離置いてんだよな。まぁ、敵対してるわけでもないんだが」
「何が言いたいのかよく分からん。そんなの当然だろ？まだ知り合ってそう経ってないんだしな」
それもそうか、なんて当然の結論に達した。何なんだったんださっきの異次元めいた話は。
「そうだ。コーヘイ、明日釣りにでもいかないか？」
「釣りか…そういやそれはやったことないな」
とにかく初めての事に挑戦することが青春を楽しむ鉄則だ。
一生に一度のせっかくの高校生活なのだから、やれるだけの事をやらないと損だろう？
「釣具とかは借りれるよな？」
「ああ、レンタル料は――――」
と、明日の釣り話に花を咲かせてしばらく、目で店内のカナを追って見ると手持ち無沙汰にぼぅっとしていた。
…普通そうなるか。
さすがに放って置くのもどうかと思ったので、店内に入ることにした。
恥ずかしいのだが、まぁ、親友を放り込んだ立場として助け舟ぐらいは出してやらねば。
もはや作戦は破綻しているとはいえ……いや！女装して然るべき趣味の男子に引き取ってもらうのもありなのではないだろうか！
やっぱり要るわ、女物。
「珍しく困ってますね、カナ君」
話しかけるとカナはむぅと唸ってこっちをじとっと睨んだ。
「困ってるというか…もしこれで僕がすんなり服を選んで出てきたらこーちゃんはどうしたかな？」
ふむ…。……。
想像して瞬間で答えが出た。
「…距離を置くわな」
「……だからこうして突っ立ってたんだよ」

なるほど、この場における最良の選択はそれか。
まぁ、しかし感心しているほど精神的に余裕がない。ここは女性専門の店なのだ。水中にいるという錯覚をしそうな息苦しさである。
「そうだなぁ、これでいいんじゃないか？」
あまりにも場違いな場所から早々に逃げるためにも、俺は近くに飾ってあった白いワンピースを指差した。
「選ばないと出れないしな」
そう、何としても選んでもらわなければ。
「買わないって選択肢はないんだね…」
観念したカナはそのワンピースを持って清算所に持って行き、卒なく笑顔で店員とやり取りする。
…なんだ、女性服だろうと抵抗なしに買えるんじゃないか。

モール1階、飲食店の並ぶ一画。設置されたテーブルを俺達は囲んでいた。
休憩ということで、そこら辺に余りあるデザートから気分に合ったものをそれぞれ持ってきている。
よーすけは手作りアイスが地元人気なジェラートと自販機で購入した天然水、カナはこれだけ洒落たデザート屋があるのにも関わらずアイスの実にパックの濃縮還元１００％オレンジジュースという喧嘩を売っているようなチョイスだ。
せめてアイスぐらい凝ったものを選べばいいのに。
「カナはいつもそれだよな」
固執してる理由でもあるのだろうか？
うーんと唸るカナ。
「ほら、近所に銭湯があったでしょ？もうなくなったけど、あそこに行くと必ず食べてたのが癖になってね。まぁでも、パッケージが変わっちゃってるけど」
「そういやよく入りに行ったなぁ…」

靴用のロッカーが木製の太い鍵で、湯船は水風呂や電磁波もあったんじゃなかっただろうか。
源泉の発掘作業のボーリングで取り出された土がディスプレイに飾ってあったっけ…。
大きな浴槽、そんな単純なモノがやたらと魅力的に見えた幼い頃の話だ。
まぁ、入浴後のコーヒー牛乳が美味しかったよな。思い出してみると、確かにカナはもっぱらフルーツ牛乳とアイスの実だった。
「銭湯ねぇ、そんなのあったか？」
「よーすけは高校からこっち来たから知らないだろ。今や跡形も無く消えちまってるよ」
「アパートが建っちゃって面影すらないんだよ。全く、そんなものいらないのに」
手を汚れるのを避けるため、包装のビニールを器用に使って丸い実を口に運ぶカナ。
さすがに食べ慣れているな。あれはうまいはうまいのだが、手で食べるとべたつくのが玉に瑕なのだ。
「銭湯っつったって、健康ランドでもない小さい所だったからなぁ。しかし、あれだ。そういうことなら映画館も無くなったろ」
「あったねぇ…あそこも小さかったっけ」
「おいおい、新参者を置いていかないでくれ…」
「何、数年すれば同じような会話するようになるんだ。今は我慢しなさい」
「割と有名所を流してたけど、座席がホント少なかったのを覚えてる」
そうだ。スーパーのスペースを借りてやっていたあの映画館はかなり狭かった。劇場は２つあって、その２つとも１０×１０ほども座席が無かったんじゃないだろうか。
「アニメモノが多かったよな」
「あと特撮ね。場所柄家族連れが多いし。でも、”映画を観る”っ

ていう行為の方が魅力的だった気がするよ」
「あ、それは分かるなぁ。俺もよく近所の映画館に並んだ覚えがあるわ。ほら封切り初日のいい席取りたくてさ」
「……それこーちゃんもやってたよ。朝早く起こされた記憶が何度もある」
「やったなぁ…ブルーシート敷いて、魔法瓶にミルクコーヒー入れて…弁当もだっけか？」
「俺はそこまでやらなかったけどな…。
けど、確かに子供の頃ってそんな小さな事で随分楽しめたんだ。あの頃の方が幸せっちゃあ幸せだったのかもしれない」
「そうか？俺は今の方が楽しいぞ？視界が広がった感じするからな」
子供の頃より娯楽の数が増えたし、趣味なんてものは色々と試せば試すほど増えていきそうな気もするし。
何よりこうして親友とぶらぶら出歩いている今も楽しいのだし。
「陽介君、こーちゃんに懐古の情はないから分からないんだよ」
「いやいや、失礼な。分かる、分かります」
「そう？そうかなぁ……あっ！」
「どうした？」
「もう時間なんだよ。姉様と待ち合わせしててね。久しぶりに帰ってくるの」
うふふーと何とも嬉しそうな顔をする。
「兄様も休日は帰ってくるから家族5人全員集合だね」
それはともかく、よーすけもカナの時間云々の話に自らも時計を確認して、顔をしかめた。
「俺もそろそろ帰らないと」
「よーすけも用事か？」
「いや晩飯作りだ。一人暮らしだからな」
外食とかコンビに弁当とか、そういう選択肢はない辺りがちゃんと一人暮らししてると思う。俺には絶対無理だ。
「そうか、じゃあそろそ解散だな。カナ、待ち合わせって駅か？」

「うん、そこまで一緒だね」
「じゃあ俺、反対側だから」
ちょうどこのモールを挟んで駅とよーすけのアパートは反対に位置する。
まぁ、だからこそ駅前でなくモールで待ち合わせたのだけど…、まぁそんなのはどうでもいいか。
少々物足りない気もするが、平日にこれ以上の事はできない。
「じゃあな」
「バイバイ」
こうしてまずよーすけと別れた。
俺とカナは駅方向に家があるため、駅までは進路が同じだ。モールを出て、2人並びながら歩き始める。外は既に暗くなってきていた。
「…しかしさ。それ、ホントよく買ったよな」
「ん？」
カナの持っている袋を指差す。その中にはあのワンピースが入っているはずだ。
俺にメリットがあるとしても、カナには金額的なデメリットしかなかっただろうに。
「買わせた本人がいう台詞じゃあないよね。
まぁ、使う機会が皆無とは言い切れないでしょ？去年みたいに学園祭の仮装コンテストで女装させられる可能性もあるわけだし。その度に人の服借りるのも悪いからね」
「あー、確かにその可能性は高いよな」
というか、そんな事はすっかり忘れていたけども。
確かに去年女子生徒の制服を借りて体育館のステージに出てたよな。女装とはいえ趣旨が微妙にずれているためか、順位は2位だった。
それでも2位を取れる辺りがこいつのすごい所というか…いや、あれは我らが女子委員長が率先してスカートを巻き上げたのが原因

か…。
　しかしそもそも、そういった事実はそんなモノにあんな格好で出ることをこいつが承諾したからこそあるわけで――――、
「カナって昔から人の頼み事断れないタチだよなぁ」
　委員長の猛プッシュがあったとはいえ、カナに拒否権がなかったわけじゃなかったんだし。
「そうかもね」
「断ろうと思った事ないの？」
　うーんと目を細めている。それほど難しい質問でもなかった気がするのだが。
「ないかなぁ…。結局そういう頼み事って、自分が必要とされてる証拠だから」
「また小難しい理屈で動いてるなー」
「そう？」
　いかにも不思議そうな顔をするカナだが、俺にしてみればこいつは昔からそんな感じだ。かっちりこっちり理屈で動いている。
　時折見せる何を考えているのか理解不能な行動を除けば、理由と結果がきっちりしているというか…何といえばいいのか難しいのだけど、『物事の全てには原因がある』みたいな生き方をしているのだ。
　ん？何か違うな…。感情的に動かないけど、冷めてるわけでもない……もういいや。カナはカナらしいって事で。
「いや、まぁ…それがカナと言えばカナなんだろうな……っと、あれ、永歌さんじゃないか？」
　駅の看板がライトアップされているのが確認できる所まで来て、視界の奥の方に人影が見えた。駅前の広場に立っている女性が見覚えのあるスーツを着ている。
「本当だ。姉様だね」
「じゃあ俺達もここら辺で解散だな。俺はちょっとコンビニ寄ってくし」

「うん」
カナは俺より数歩先をととたんと歩いて振り返った。てっきり別れの挨拶でもするのかと思ったのだけど、
「ねぇ、明日空いてる？」
と聞いてきた。
カナからそういう誘いがあるとは珍しい。珍しいのだけど、
「すまん。明日はよーすけと約束してるんだ」
「うーん、相談したいコトがあるんだけど……駄目？」
カナにしてはこれまた珍しく食い下がってくる。
けど、約束というものは反故にすると後々目覚めの悪いものであり、重複する時は最初の方を取るというのが俺の主義だ。
「明日は無理だ。明後日…日曜だったら大丈夫だけど」
「うん、そうだね…」
頷いてカナは、今度こそ『バイバイ』と言って、自らが”姉様”と称して敬愛する永歌さんの所へ駆けて行った。
日本人らしくも、姉弟（きょうだい）らしくもないハグをされるカナ。

――――まさか、その姿が俺がカナを見る最後の機会になるとは思ってもみなかった。
もしもあの時、カナの相談を聞いていればあんな事にはならなかったかもしれない。

…なんてな。
そんなモノローグを入れてみたくなるほど、カナにしてはホントに珍しい行動だったのだが、うんまぁ、日曜になればその理由も分かるだろう。
２人が仲良く歩き出したのを見届けて、俺も小腹を満たすようなものを買いにコンビニに向かって歩き出した。

□■

翌日9時、俺はよーすけのアパートに向かっていた。
別に駅前で待ち合わせしてもよかったのだが、約束したところで休日の9時にあいつが起きるとも思えなかったのだ。
毎晩夜更かししてネットゲームやらラジオやらを最大限に楽しんでいるあいつは、かなり朝が弱い。
だからこうして起こすためにもあいつのアパートが集合場所という事になったという経緯(いきさつ)だ。
で、そのアパートは駅前を通って、ショッピングモールの横を通ったその先にある。
実家からでは高校に通うのは辛いということで一人でこっちにきたよーすけ。妙に馬が合ってよくつるんでいる。
ゴールデンウィークもこいつとゲームセンターに行ったり、東京に出てみたりと高校生らしく金を使う遊びにチャレンジして、連休中の宿題をすっぽかす羽目になったりした。
結局2人してカナに土下座して答えを写させてもらったのが、つい3日前だったりする。
…今週宿題なかったよな。
モールを過ぎてしばらく、町並みが閑静なものに変わってくる。
個人住宅が規則正しく並んでいる住宅街の中、1つだけ何故か貸しアパートとして改装したものがあるのだ。
安っぽい所ではなくしっかりとした造りのそのアパートは少々高いながら、交通の便もいいしで人気物件だったらしい。ここが取れてよかったと前によーすけが話していた。
そのクリーム色のどっしりしたコンクリート建てがやっと見えてきた。
2階へ上るための洒落た螺旋階段が備え付けられているのだが、残念な事にあいつの部屋は1階だ。
103号室、大塚陽介。
マジックペンで書かれた下手な表札のあるドアの前に立って、呼

び鈴を鳴らす。
…返事なし。
まぁ、予想済みだ。寝てるに決まってる。
どうせインターホンの音じゃ起きないだろうから、鉄製のドアを叩いてみる。
近所迷惑を考えるとそう長くできないのだが・・・これでも駄目か。今日のあいつはいつも以上に深い眠りについているらしい。
じゃあどうやって起こせというんだと取っ手を回したら、ドアはあっさりと開いた。
「……」
無防備すぎだろう。いや、直接起こされないと起きれないと踏んで開けっ放しにしたのか？どっちにしろ宜しくない。
そう顔をしかめつつも、よーすけらしいと納得して部屋にお邪魔する。
さてさて、アパートまで起こしに来たは何度かあるとはいえ、実際あいつの寝顔を見るのは初めてだ。野郎の寝顔なんて見てどうだってことはないのだけど、気になるといえば気になる。
奥にまで入って、ベッドがあったと記憶している位置に目を向けた。

「――――――――」

……、……。
……、……。
……。……っ。
な、んだ、コレ…。
何だコレ、なんだコレ…ッなんだコレなんだコレ何だこれ何だコレ！！
「何で…こんな事になってるん、だよ……」
昨日会った時には何もおかしな事なんてなかったのに、昨日別れ

た時には何の予兆もなかったのに。
今日だって釣堀にいく約束もして、時間も決めて場所も決めて経費も計算して…！
なのに何で！
「何で死んでんだよぉ…っ！！」
深い眠り、なんて比喩をつい先ほど使ってしまった事にすら憎悪する。深いどころか、永遠に眠ってしまっているじゃ、ないか。
そんな気はなかったんだ。こんな事になるなんて分かるわけないだろ…？不謹慎、なわけじゃない。俺に責任があるわけじゃない。俺が悪いわけがない！
……端にくっつけられたベッドの上、壁にもたれかかる様にしているよーすけ。
その生死はこれでもかというぐらいに明らかだ。
目がない、鼻がない、顎がない、指がない足がない……腹がない！
生きてはいない。生きているはずがなかった。
眼球だった白い球体の破片が潰れて頬に張り付いている。空っぽどころか根こそぎもぎ取られたように腹部は背骨だけが露出している。腹の皮膚やら脂肪やら筋肉やらを破った中にあっただろう臓器はまとめて枕元に放置されている。
人の生に対する冒涜だ。命というものを生き物からあらゆる手段で剥奪したような圧倒的な破壊…。
死体とすらいえないスプラッターなスクラップがそこにはあった。
「ぅうぉおぇえ゛！」
直視して、その惨事の内容を1つ1つ認識してしまったせいで、今になって吐き気を催す。
見るべきじゃなかった。いや、そんな事は分かりきっていたけれど見るしかなかった。目を逸らす事を許さない、圧力を確かに感じた。
喉まできた吐瀉物（としゃぶつ）を抑えきれるわけがなく、床に半分も消化されていない朝飯をブチ撒ける。

胃酸の苦味が口内を満たす不快感と頭に浸透するような悪寒が俺の体を無理やり床にへたり込ませた。あるいは脳まで口から吐き出しそうな気持ち悪さが原因か。

とにかく、体に力が入らない。

くそっ！何なんだよ一体…何でこんな事が起きてるんだ！

あまりに唐突すぎる。不意打ちだ。まるでまるで何が起きているのか分からない。

……どういう理由があって、俺の親友がぐちゃぐちゃに殺されなきゃならないんだよ！

「ぁ…おぇ…？」

親友……親友！

そうだ、そうだった。親友はもう1人いる。

まさか、まさか！

もしもコレが俺の交友に関係しているとするならば、もう1人…もう1人対象になり得る人物がいるのだ。

縋(すが)るようにポケットからケータイを取り出した。

電話帳のあ行、最初の人物。逢川要、アイカワカナメ、かなめ、カナ…ッ！

鳴り出すコール音。1回、2回…、その間延びした電子音が異常に癇に障る。

昨日の別れ際、あんなふざけたモノローグを入れてしまったことを、それこそ死ぬほど後悔してる。

今さっき、軽い気持ちで言った言葉が、冗談にもならない伏線になったばかりなのだ。

「お願いだ！出てくれ……！」

繰り返すコールに焦燥が加速する。

今、向こうのケータイはカナの好きなスピッツのチェリーを流しているはずなのに…。

時間の経過をまともに判断できないほどに心臓の動悸が早すぎる。

『こーちゃんには言ったっけ？』

こんな時に、こんな時だからこそ、こんなに縁起の悪い時に、カナの言葉が脳を満たしてくる。
『もしこれで僕がすんなり服を選んで出てきたらこーちゃんはどうしたかな？』
距離を置くなんてそんな冷たい事はもう言わない。そんな心無い事なんて本気じゃない。
『相談したいコトがあるんだけど……駄目？』
何で、何で何で何で！俺はあの時、あいつの頼みを聞いてやれなかった！？大切な友達の、相談に乗ってやらなかった！？
『こーちゃん、こーちゃん…？』
あぁ、お願いだから・・・、お願いだから、もう一度、俺の事をそう呼んでくれよ……カナ。
……。
……、……。
……、……。
「〜〜〜〜〜〜〜！」
応答は、なかった。

Irreplaceable Heat

走った。とにかく走った。
信じられないという気持ちで、その目で実際に確認するまでは納得なんてできないで、ひたすら走った。
ショッピングモールを過ぎて、駅前を通って、その先にある馴染みのある一軒家を目指してただただただ走った。
子供の頃からよく行った2階建ての白いな家。母親が再婚して、カナがやってきたあの家。
2階には大きな部屋があって、それを姉兄弟(きょうだい)で分けていて。
入って最初のが永次さんの部屋で、1つ目のカーテンを隔てて永歌さんの部屋、そのさらに奥にカナの部屋になっていて…。
仕分けがカーテンじゃプライバシーなんてないよねぇ、なんてカナがそんな事を言っていた。
浴室がやたらと大きいのは父親のこだわりで、水草の映えるリビングの大水槽に泳ぐ熱帯魚は母親の趣味で！
人様の家というにはあまりに愛着のある家なのだ。
…やっと、そんな家の前にやってきた。
「ぁ…はぁっ、あぁ…ぅあ、はっ！…ぁぐ」
息が切れ切れになって胸が痛い。一気に走りきったせいで、体が酸素を求めて膝が震えている。
いや、確認するのが怖いからか。
入らなければいけないと思っているのに、恐怖で足が上がらない。その一歩を踏み出してしまえばもう後戻りはできない…から。
後悔するかもしれないから。目の当たりにしてしまうかもしれないから。だから、だから怖い。
「くっそ……ぉ！」
何も考えるな。そう言い聞かせて、勢いでインターホンを鳴らす。
一度鳴らして、返事を待つ。

もしこれで出てくれたら。何もない様に顔を出してくれたら。
でも、だったらケータイにだって出るはずで。
駄目だ、考えるな。そんな最悪は予想するな！
汗で滑る指に構わず焦りのままに連打。もう、そんなのは祈りに過ぎなかった。
誰かが出てくるまで、何かが起こるまで待ち続けるための停止動作。
呼び鈴を押し続ける指をどうしても止めれない。
馴染み深いはずの電子音が壊れたように鳴り続ける。０．１秒間をリピートする動画のような有様だ。
それでも止めるができない。できないできない、できないできないできないできでできないでき――――

「いや、いやいや…幾らなんでも連打しすぎでしょ、こーちゃん」

ドアが少し開いて、その隙間から、何でもないようにカナが顔を出していた。
……こーちゃんと呼んでくれた。

カナの家のリビング。テーブルを挟んで向かい合う形で２人は座っている。
静寂と篭った空気の作り出す閉鎖的な、遮光的な空間。外界から自分の身を守れる壁がある事がこれほど安心するものだとは思わなかった。
あぁいや、ほっとしたのだろう。ここはあそこと違っていつも通りで、非日常的な一切が隔絶されているから。やっと慣れ親しんだ所に帰ってきたと実感できた故に。
とりあえずと出された麦茶を３杯ほどおかわりして、やっと俺は落ち着いた。

最初にどうしてケータイに出なかったのか訊いたところ、熟睡していてまるで気づかなかったという。呼び鈴でさっき目が覚めたらしい。
ホントに、心臓に悪い。けど…よかった。
カナが生きていた事で幾分か冷静を取り戻した俺は事情と経緯を話し始めた。
約束でよーすけの所へ行った事。ドアが開いていて中に入るとよーすけが死んでいた事。その有様がホントに酷かった事。それで、カナの事が心配になってここまで来た事…。
「…やっぱ俺の見間違い、とか？」
ここまで来て未だ信じられなかった。あれは白昼夢か何かだったんじゃないかと、今だったら思えてくる。
「うーん、幾ら何でもそんなの見間違いようがないよ。僕は見てないから何とも言えないけどさ、そこまで細部まで見たんならちょっとねぇ…、何と見間違えるのさ」
「幻覚は？ないモノが見えたっていうのならなくはないんじゃ…？」
「あのね、こーちゃん。幻覚なんてそう簡単に見えるものじゃないんだよ。2、3日一睡もしてないとか、幻覚作用のある薬物でも摂取しないとちょっと考えられない」
断定形で強い口調でカナは俺の儚い希望を切り捨てた。
けれど、これほど心強い奴もいない。俺の話を聞いて目を見開いて驚いたものの、しっかりと落ち着いて俺に道を示してくれる。
「別に強いストレスを感じてたわけでも、大麻とか覚醒剤とかやってるわけでもないんなら、残念だけど、やっぱり陽介君は死んでるっていうのは間違いないよ」
「……そうだな」
「問題はどう考えても殺されてるって所だけど……動機は…怨恨の線でいくと彼女か、あるいは仲の良くないっていう姉かな？」
「他にも考えようによっては幾らでもいるさ」
「そりゃあね。まぁ、でも別にそんなのは今重要じゃないよ。僕達

のやれることなんて決まってるんだから」
「え？何かできることがあるのか！？」
予想外の台詞に思わずテーブルに乗り出し、
「うん。一一〇番すればいい」
「……」
再びソファに腰を下ろした。
拍子抜け、というか俺の頭からは完全に抜けていた選択肢だ。
「そんなのに意味あるのかよ！」
期待外れの一言に声を荒げてしまう。カナが悪いわけではないと分かっているのだけど、この非常時に平凡極まりないその意見にどうしても反発せずにはいられなかった。
そんな醜い俺にカナはどこまでも落ち着いている。
「あのね、こーちゃん、逆に警察に通報しないのにメリットってあるの？」
「そ、それは…」
麦茶を口に含み、諭すように話し始める。
「陽介君が本当に殺されたっていうのならいずれその死体は誰かが見つける。それに現場で吐いちゃったんでしょ？交友関係から探りを入れられればこーちゃんがそこに居た事ぐらい分かるよ。何かを隠してるなんて勘繰られたくなかったらやめた方がいいね。
だいたい、死体が見つかるまでのごく僅かな猶予の間に何かができるような取っ掛かりが、僕達にはないんだよ」
痛い言葉だ。当然すぎて正しすぎる。反論の余地もなくその通りだった。
「疑われちゃったら警察から何の情報も得られなくなるよ、こーちゃん。今できる最善は被害者の死を悲哀している友人であるコト、なんだから」
「……分かったよ」
「じゃあ、僕がしてくるからちょっと待ってて」
自分が提案したのと、俺では警察相手に落ち着いた対応ができそ

うにないのとを考慮してかそう言って、カナはリビングから出て行った。ケータイを取りに行ったのだろう。
固定電話ならリビングにありそうなものなのだが、父親が週末に何回も掛かってくる彼の母親からの細かい心配の電話にぶち切れて叩き潰してしまったらしい。通話相手が表示できない電話の起こした悲劇だったとか。電話にとっての悲劇だなんて、そんなくだらない事を言った覚えがある。とにかくそれ以来、固定電話が家からなくなり、各々ケータイを使っている。
俺のケータイを貸せばよかった、そう思いながらソファに沈み込む。何もかもカナにやってもらっている今の俺というのはかなりヘタレに見えていることだろう。
「はぁ……」
自然に溜め息が出てしまう。何もしないというのも苦痛なので、周りを忙しなく見回してみた。
水音を響かせる水槽の中にはコバルト色をした熱帯魚が泳ぎ、壁に掛けられたホワイトボードには今日の昼食メニューが書かれていた。手元を見ればコップの表面で結露した水がテーブルを濡らしている。
見慣れたリビング、のはずなのに少し暗いし息苦しい。
あの悪夢みたいな場所から逃げ果(おお)せたというのにまだ何か正体不明の不安にどこか心がざわめいている。きっと非現実的な状況からの脱出を、未だに信じられないのだろう。ついさっきまで、カナも死んでしまったのだと気が気でなかったのだし。
「あぁ、カーテンが閉まってるからか…」
ふと気づいてガラス戸のある方に目を向ければ、早朝でもないこの時間に草色のカーテンは閉まったままだった。確認するとリビング自体明かりが点いていない。
心象ではなくホントに部屋が暗かったらしい。しかし…暗いのは落ち着かないな。
電気を使うのも悪いので空気を入れ替えるついでにカーテンを開

けてしまおう。
一度はぐったりと体重を預けたソファから起き上がってフラフラしながらも歩を進める。勢いよくカーテンをスライド。
シャッという子気味いい音と共に、

血の、血のこびり付いていたガラスが現れた。
ビチリと、叩きつけるように飛沫が張り付いた様な、血跡・・・血痕。

「ぁ…ぁぅうぁ……？」
声が意味を成さない。
ここはどこだ？カナの家だ。よーすけの死んでいた非現実的な、悪夢的なあの場所じゃない。ないはずなのに、悪夢から覚めれない。醒めれて、ない。
そこにきて、やっと麻痺していた思考が正常に動き出す。
何で、気づかなかった。おか、しい。おかしいじゃないか。
俺はこの朝っぱらから、他人様（ひとさま）の家に上がり込んでいるというのに、母親の静菜さんにも父親の永助さんにも永歌さんにも永次さんにも顔を合わせていない。
カナが寝ていたというなら、なおさらインターホンを連打している不届き者の姿を確認しにくるのは、他の誰かである可能性が高いはずなのに、だ。
今、今現在、この家に人気（ひとけ）らしい人気は一切ない。静寂がただひたすら空気を沈殿させている。
昨日カナは、永歌さんと帰っていって、週末には永次さんもいるのだと、言っていたのだ。
午前9時過ぎ、久しぶりに集まった家族全員の休日に、カナだけが家にいる。なんて事がある、のか…？
いや、いやいやいや！そんな可能性は、そんな希望はあり得ない。
おい幸平、しっかりしろ。前を見ろ、ちゃんと認識しろ。お前の

目に映っているのはガラスに飛び散るほどの血飛沫の跡、なんだぞ！
篭った臭いが、また鼻を掠めた。
ああ、何て事だろう。何が慣れ親しんできた場所、だ。
こんな、こんなにも非現実が染み渡って臭っていたんじゃないか…。
篭ったような鈍く重い臭い。錆びた、鉄の臭い。
…血の臭い。
バッと振り返って、ある場所を確認しに駆ける。
リビングの一角を切り取るように、襖で囲われた和室と呼ばれる空間。今は閉まっている、畳敷きの部屋。
あるなら、あるとするなら、ここ以外ない…っ。
「……」
異常すぎて、声すらでない。ここに死体が、惨状があると予測してのにも関わらず、ショックで心身共に痙攣してしまっている。
ポタリと血の雫が染み込むことすらできなくなった畳上の血溜まりに落ちた。
和風らしく和紙風のプラスチックに囲まれた釣り電灯の紐に、女性の首が、括りつけてある。それは多分静菜さんのものだ。
髪と紐を括ってぶら下げて、無様に晒した顔に表情はない。
目もなく鼻もなく、耳もなく、顎も当然なく、頬もなく、顔のさらに上半分だけと形容した方がいいような有様のモノ。
下がない故に上の歯を露出している姿はもはや仮面や何かなのだと思いたいほどに、ヒトではなかった。
そしてその他のパーツは床に転がされてある。散らかされて、ある。
眼球がもがれた下あごの上に、露出した舌の上に乗せられてちゃぶ台に乗せてある。切断された両手は右手と左手で無理やり握手を交わすようにお互いに掴み合っている。足2本は×（バツ）を描いて、残った胴体は捻られている。
卒なく何でもこなせて、卒なく人体を解体できて、

卒なく人も殺せる…？
こんな場所の隣で、薄い襖で仕切られただけのその隣で、平然としていられる人物なんて、もはや疑いようもなく、希望する余地もなく、切望を許されるはずもなく――――、

ガバリ。と後から枝垂れかかるようにして、顎が肩に乗っけられた。
密接した肩越しにこそばゆい振動と甘い吐息を感じる。
「駄目だよ、こーちゃん。勝手知ったる他人の家とはいえ……誰だって見られたくないモノがあるんだから」

たっぷりと皮肉を含んだ、酷く冷たい、声。
「あぁァあぁぁぁアあああァぁあああ！！」
もうそんな台詞すら聞いている余裕などなく、俺は振り向きざま腕を振るう。
しかし、
――バギリ
「おぉおうぅぅぐっ」
振り向いた瞬間、右側に恐ろしい激痛が走った。
左に吹っ飛ばされながら一瞬見えたのは、金属バッドを持ったカナの姿。
当たり前だった。リビングを出た理由なんてこれ以上もないほどに分かりきっていた。
痛がっている暇などない、そんな行為は死ぬに等しい。
無理やり起き上がって走る。リビングを出て廊下の先、悪夢からの出口、玄関へ。
右腕が二の腕のところでブラリと揺れて、右胸部が刺すように痛い。
腕は完全に折れているらしかった。もしかしたら、肋骨もイってしまってるかもしれない。

けれど、まだ俺は生きている。生きていれば傷は治る、治るのだ。だから逃げなくてはいけない。逃げて逃げきって、生きなければいけない。

「――――ぁ？」

ひたすら前に見える玄関のドアに向けていた視界に、何かが映る。赤黒い、何か。

ボトンと床に落ちて跳ねたソレは、さっきぶら下げてあった首だった。

「ひぁあああああ！！」

生首と目が合った。

目なんてないのに、口すらないのに、目が合った。

それだけで、もうその先に進む事なんてできなくなってしまう。

無理だ。無理なのだ。これを跨いで進むなんて事は、どうしてもできない…！

咄嗟に振り向くと既に廊下はカナが塞いでいた。逃げる場所は、階段しかない。廊下の途中に備え付けられている木製の階段だ。

2歩分引き返して、カナが来る前に段差に足をつける。死に物狂いで駆け上った。

横目にカナが上ってくるのが見える。追い詰めるように、こんな抵抗は無駄だとばかりに、ゆっくりと上ってくる。

息を切らして上った2階には部屋が2つしかない。父親である永助さんの書斎と、カナ達が使っている子供3人の大部屋。

迷わず大部屋に逃げ込んで、鍵のついていないドアの取っ手を左手だけで全力で抑えた。

「っはぁ…はぁあっんぐ…！」

口内に溜まっていた唾を飲み込んで、無理やり息を整える。

かつて3人で使っていたとはいえ、入り口は1つだけのこの部屋なら、このドアを突破されない限り部屋に侵入されることはない。

万が一入られても広い部屋なら逃げ回りやすい、はずだ。

問題は…問題はここからどう脱出すればいいのかだが、最悪窓か

ら飛び降りれば何とかなる、と思う。
２階ならそれほどの高さもないし、屋根があるから落下の体勢は整えやすい。
けど、だからといって、今この左手を離す事はできないのだ。離した瞬間、カナが入ってきたら？ドアから窓の所まで走って、鍵を開けてガラス戸をスライドさせて、外に出る。その所要時間よりカナの進入が遅いと思えない。
分の悪すぎる賭けだ。そしてかかっているのは俺の命である。
どん、と鈍い音がすぐ外で鳴った。
ドアを挟んだ向こうに、いる。
一層力を込めてノブを握って、体の全体重をドアにかける。内開きである以上、体重をかけていれば例えノブが回されても開かない。
大丈夫、大丈夫だ。あのか細い腕で高校男児の体重は押し返せない。
「……？」
力がかかってこない？いや、それどころか、ノブに触れた感触すらしない。
何だ？何を考えているんだ？まさか、俺は何かを見落としてるのか？他に、この部屋に入るルートがあるのか？・・・それはない。現にカナは今ドアの向こうにいるのだ。
じゃあなんだ、何を考えている？俺は文字通りな致命的なミスをして、いる？
と、澄ました耳に奇妙な音が混じり始めた。
――ぐじゅり、ちゅく…ぐじゅぐじゅ……じゅちゅ…
何の音だ？
……その疑問はすぐさま解消される。
感触が、あった。手ではなく、足に。靴下越しに、生温(なまぬる)く。
びちゃ…びちゃ、びちゃ、びちゃ、
びちゅり、びち、ぁ…びた、びちゅびちゅ…、
びちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃびちゃ……！

「ぁひ、はぁっ、あ、あ、あっ・・・」
血が、血が血が血が！ドアの隙間から溢れてきている…っ！
咄嗟に、手が離れた。
それが、それこそが致命的すぎるミスだと分かったところで遅い。
難なく、何の力もなく、俺が必死に守っていた防壁はいとも簡単に打ち破られた。
ノブが回され、ドアが開けられ、カナが入ってくる。
血だらけの服を着た、右手に血雫滴らせるバッドを握った、逢川要。
進入して一歩も進むことなく立ち止まり、俺を見つめている。
別に楽しそうに笑っているわけでもなく、ただいつも通りのぼうっとして見えるような、何を考えているのか分からないような、表情。
その唇が僅かばかり吊り上った。
「ねぇ、こーちゃん。ここをどこだと思ってるの？」
「え？」
意味が分からない。分からないという事がここまで怖いとは思わなかった。が、そんな感想を抱いている場合でもない。
…カナは何が言いたいんだ？
「母様を和室で殺したのはね、例外として母様に自室というものがなかったからなんだよ、こーちゃん」
必要限でしかないカナの言葉。それに含まれた意味。
和室、例外、母様、自室、ない……、あぁ、そうだ。そうだった。
あそこに死体があると予測していたというに、俺はすっかりその数を数え忘れていた。そもそもあそこまでぐちゃぐちゃになっていた死体を見て何人分なんて事を考えられるわけもないけれど、あそこにあったのが1人分の死体だったとしたのなら…？
アパート暮らしのよーすけは言うまでもなく、自室のない静菜さんは代わりに和室で、そしてもし、ここの隣にある書斎で永助さんが殺されているとしたら…？

カナがすっと左手を上げてぴたりとの背後を指差す。
無言で、物理的に何の強制もないのに、それはもう呪いだった。
抗う事のできない絶対の指示。
カナの声が頭に響いてくるという幻聴。
『ほら、後を向いてみなよ、こーちゃん』
振り向いたら、何があるのかなんて分かりきっているのに。そんな隙を作る事がどんなにまずい事だとは気づいているのに。
何よりもまず前提として、それをしなければ始まらないとばかりに、俺は振り向いてしまった。
その先には当然のように、窓のある壁に寄りかかるように、永次さんの死体が…いや、残骸が、
胸部を、肋骨を無理やりこじ開けられて、その中には何もない。肺は、心臓はきっちりぶっつり切りとられて、机の上に並べてある。
もう背中の皮と骨しかない胸部を晒したその下半身は、さらに酷い。
何も穿いていない局部を何度も何度も突き刺し抉り尽くした電気ドリルが最終的に、その中央部に突っ込んであったのだ。
頭部がないのは当然で、なくなったその行方は分からない。
しかしそんな事はどうでもよかった。
再び振り向いた時、視界に映っていたのは左横からバッドを振り被るカナの姿。
利き手でもない左振りだというのに、恐ろしく綺麗なフォームの一撃は命を奪うものではない。急所をわざと外した一撃で今度は左腕を折るつもりらしい。
だけどどの道、その殴打によって左腕まで失えば、もはや死んだも同然だ。
腕の上の方を狙ったそれをとにかく低く屈(かが)んで避けようとするが、本人が思うほど不恰好で愚かしい避け方だった。
一打目を回避しても二打目が避けれない……！
そこで、正真正銘の偶然で、

「あ」
カナの手からバットがすっぽ抜けた。
全く容赦のなかった力を加えられたままの金属バットは、俺の頭上を通り、後の窓を盛大に割る。
ガラスの破砕される劈く音と共に、凶器は持ち主の手を離れて家の外に放り出される形になった。
その、予想外すぎる出来事に、しかしカナはさほど驚いてはいない。
武器を失ったというのに、自分の有利性が失われたというのに、その顔には何の焦りもない。その妙に余裕のある様子を見て、むしろ焦る羽目になるのは俺だった。
「あぁ、ドアを開けるために父様の足を潰した時の血が、手元にまで伝ってきちゃったみたいだね」
何でもないように滑った原因である手にべったりと付いた血を見て、言う。切断して潰して滲ませた父親の血を見て、言う。
「滑り止めのグリップを兄様が剥がしちゃってたのも理由の1つかな？もう、本当に兄様は…モノは大切に使わないとっていつも言ってるのに…」
愛おしそうな嘆息。その兄様を、殺した本人だというのに、そんな言葉が自然に出てくる不自然。
分からない。分からなすぎる。
何でお前はよーすけを、家族を殺したんだ？
その質問が口から出かかって、
「まぁ、別にバットなんてなくても、素手で十分人体が破壊可能なコトは確認済みだし」
ぞっとする言葉にかき消された。
「あ…ぁあ」
軽く、あくまでも軽く放たれた台詞だというのに、そこには確固たる自信がある。
手負いの、右手の使えない俺ぐらい…いや、元より辰田幸平とい

う人間ぐらいを殺害するのに解体するのに、分解するのに武器など要らないと、事実として告げている声だった。
逃げる事を止めていた足をもたつきながら動かす。けれど、そんな不安定な歩行が成立するはずもなく、体は傾いて部屋を仕切っている1枚目カーテンを巻き込んで絨毯の床に転げた。
それによって幕が取り除かれて閉ざされていた第二の部屋が現れる。…そこは、永歌さんの部屋だった。
転げた体勢、目線の先。切られた自分の首を腕に抱え込んでいる初恋の相手がいた。
よーすけと同じくしてベッドに横たわっている彼女の体は他の死体に比べて損壊が少ない代わりに、胴体の至る所にナイフやフォークが突き刺してある。唯一傷つけられていない顔は瞳を閉じて涼しげに眠っているようにすら、見える。
何の皮肉だ、コレは。
が、そんな感想なのか感傷なのかよく分からないぐちゃぐちゃな思考は頭部の打撃によって脳外に飛ばされた。
頭を蹴られたらしい。靴下も履いていない素足だというのにその甲は信じられないほど硬かった。蹴り方を、心得ている。
頭どころか胴体も一緒に転がるほどの衝撃にゴロゴロと床を滑り、2つ目のカーテンの裾を手で掴んでやっと制止した。
当然の犠牲として、握ったカーテンが今度は真下に落ちてくる。
突っ立て棒が頭に直撃して、2度の衝撃に酷く脳が揺さぶられ、体に力が入らないまま仰向けになった。
白い天井がぼやけて目に入る。随分と視界が狭く感じられた。
人というのは焦れば焦るほど周りが見えなくなる。そんなくだらなすぎる事柄を実体験させられている、それも皮肉。
ホントに、ここがいつも生きている世界かと思うぐらいに視野が狭い。モノを認識することができない。
「う、ぅぅう…」
動悸がぶり返して、体中気持ち悪い汗を掻いている。うまく息が

できず、まるで生きた心地がしない。
何とか立ち上がろうとして、腕に力を込めたが、その手に何かが張り付いてずるり滑った。
背中を打って、ただでさえ少ない空気を吐き出す羽目になる。
「な…ん」
床に何かが散らばっている。
…紙だった。ぴったりと手の平にくっ付く光沢溶液を表面に施した分厚い紙。
世界を切り取るなどと、魂を抜かれるなどと言われる小さな窓。
写真、と呼ばれる四角い思い出。
それに、

カナと永歌さんと永次さんが裸で写っている。

永歌さんの唇とカナの唇が重なっていて。詠歌さんの手がカナの胸を撫でていて。
永次さんの腕がカナの下半身へと消えていて。永次さんが横になるカナに覆い被さっていて。
どう見てもそれは情事のワンカットで。
そこら中に気が狂うほど広がっている写真のどれも中心にいるのはカナだった。
姉弟(しまい)なのに、兄弟(きょうだい)なのに。
「何だよ、コレ……何で、こんな事…」
意味が分からない。今度こそ頭が破裂(パンク)しそうだ。
血が繋がっていないとはいえ、家族なはずなのに。カナは、男のはずなのに。
…写真の中にいるカナは女として存在していて。
「あははっ…こーちゃんは鈍すぎるんだよ」
写真から離した視線の先、カナが俺を見下ろしていた。
哀れんでいるわけではない、ただ今の状況を楽しんでいるような

顔。
それはホントにカナ、なのか？ずっと一緒に過ごしてきたカナなのだろうか？
殴る事もなく蹴る事もなく、そこに立っているだけなのに、まるで異質なモノに見えてしかたない。
圧迫されているような、ざわめくような感覚がぎちぎちと体内を暴れ回る。
カナが右腕を肩の高さまで持ち上げた。
俺が知る限り怪我などしていないはずの、いつも服に隠れていたその腕には包帯が巻かれている。
するすると白い殺菌布を解いた向こうに見える白い肌に、
無数の注射痕――――、
「高校生にもなってここまで女っぽいのは異常だよ、普通はさ」
異常に青紫に赤の斑点を浮かび上がらせた腕、異常に女性みを帯びた体。
「兄様がネットで買った物らしいんだけどね。錠剤を含めて色々と」
まともであるわけがない。何の医療的監督の行われていない中での、薬物投与。その結果。
「お陰で結構ガタがきてるんだ、この体。頭痛がするのはしょっちゅうだし、吐き気もよくあるなぁ…あと体の節々が痛いのも、ね。
思春期にこんな事しちゃったもんだから、最近性自認も結構めちゃくちゃ…。実は自分が男か女かよくわかってない。
まぁ、一番困ったのは胸かな。さらしを巻いてたんだけど、どんどん成長しちゃうしさ。…隠すのが大変だった」
今や隠す意味をなくして膨らみのある胸はあるがままにされて、細い体つきは丸いカーブを描いている。
あぁ……、
今更ながら、今更ながらカナの服装に目が留まる。
赤い血飛沫が目立つ白地のその服は、昨日買った女物の白いワンピース。

「…でも、どう？似合ってるでしょ？」
そう言って裾を持ち上げてみせるカナ。
気づかなかったが、薄くルージュも引いている、ようだった。
…そういうことか。
『僕は姉様兄様から買って貰ったりするのがほとんどだけど』
なのにいつも見栄えに無頓着な服装をしていた理由は、貰う服の尽くが女物、だったから。
外に着ていく事なんてできるわけになく…。
けれど、今ならこの服装こそが正しいのだと身に染みて理解できる。
昔からずっと女っぽい男子と思っていたカナが今では生来の女にしか見えない。
「姉様は同性しか愛せなかった。兄様はあれで要領が悪い。その欲求不満を解消するのが逢川要の役目である以上、この体が見ての通りになるもの当然でしょ？
私を女にするという点において姉様と兄様の利害は一致してた」
一致してたから？一致してたらその思惑通りに扱われるのが、当然？
そんな事があるわけないのに。そんな役目を担う必要なんてないはずなのに。
…突とカナが口を開いた。
「私はさぁ、鏡なんだよ。他人の望みを映す鏡。
人が私を見る時、そこに映るのは鏡に映った別の何かであって私本来じゃない。光を反射してしまうが故に本来の姿を見られるコトはない…なんて感傷的な比喩だけど、まぁ、これが結構的を射ていてね？
簡単に言ってしまえば、自分に対する他人の印象のズレかな。こーちゃんだってあるでしょ？第一印象と違ったとか、全くそうでもないのに偏見を持たれたりとか、さ。
私の場合それがちょっとキツイ…というか特殊なんだ。尽くの人

間に違う印象を持たれて、ずっと変わるコトなくそのままと言えばいいのか・・・。
問題だったのは、私自身は自然体でいるのに関わらずそんな誤認しか生まれないコトだ。猫を被ってるわけでもないのにさ。
何時の間にかそんな印象で周りが固まっちゃってて、物心ついた時にはもうどうしようもなかった。無茶にそれを振り払おうとすれば、私の世界が容易く壊れてしまうなんて分かりきった話だものね。
こーちゃんは私の…僕の事を何でもこなす頼りになる人物だと見てるようだけど、姉様は私を甘えん坊だと思っていたし、兄様は自分の言うコトを何でも聞いてくれる弟分と扱ってたんだよ。
どう全然違うでしょ？これが、全部両立してた。別に故意にそうしたわけでもないのに、私自身は確固たる唯一であるはずなのに、相容れない印象が複数生まれてしまっている。
何故か、何時の間に、何の理由も見当たらず、ただソレが逢川要の役割だと言わんばかりに私のいる世界はそうなっていた」
抗いようのないイメージがそこにはあって、まるで行き止まりの袋小路で行き詰まった感覚が身にを絡める。
「でも、そんなまるで違う印象を持っていても、１つだけ共通点があるんだけど…こーちゃん分かる？」
「分かん、ねぇよ」
「そのどの印象にしたところで、私という…逢川要という人物はその人にとって都合のいい人間なんだ。
こーちゃんは頼りになる人間として、姉様は愛玩の対象として、兄様はそのまま何でもしてくれる人材として、実際には身近にいなかった、そしてどうしても欲しかった誰かを僕に見てる。だから、望みを映す鏡ってわけ。
皆の中には私じゃない私がいて、ホントウの私は一度たりとも日の目を見る事はないと分かっているけど、嘘しかなくて嘘だけしか見てもらえないとしてもさ、私は結構満足してる。
兄様や姉様に異常と思えるほどに求められても、辛い事もたくさ

んあったけど、それはそれでよかったんだ」
閉じた瞳の向こうに夢を見ているような表情。胸を満たして、心を穏やかに、カナは告白した。
『それでもよかった』から、
「…そんな毎日が続くのなら幸せだと思ってたよ」
少し哀しげな声色を混ぜて、溜め息のような言葉を吐く。
過去形。今は変わってしまった過去の想い。
『幸せだと思っていた』けど、
「けど結局、そんなモノですらなくて、私は代替物だった。
鏡の映すものは虚像であり、虚像は偽物で幻で…比喩した通りの皮肉が待ち構えてたよ。
望みを映そうと代替物は代替物で、代わりでしかない。

母様父様にとっての兄様の受験失敗時のスペアというのは言うに及ばず、
姉様にとっては代えの利く彼女であり、兄様にとっては代えの利く玩具であり、
――――こーちゃんにとっては代えの利く親友、だった。

兄様はめでたく大学に合格して彼女を作り、姉様は同性愛者（うんめいのヒト）に巡り合い結婚式を挙げ、…こーちゃんは親友を作った。
ははっ、ホンモノが現れたんだものニセモノじゃあ敵わないや。
望みのモノが手に入った以上は、鏡に映る虚像など興味すらなくなるものなんだね」
自分が代えの利く人間であるなんて、誰でも思うような安っぽい葛藤であるはずなのに。
カナの場合は特殊、だった。
代えられるはずもない、親友という役回りですら、実際に代えられていく様を傍観する事になってカナは確信した。
あぁ、自分は偽物どころか代替物なのだ、と。

『全く、ここ最近は色々あって目が回るよ』
そんな言葉が、今になって思い出される。
それはそういう意味、だったのだろう。
今まで自分を必要としていた人々が、離れていって、ホントを見つけていって。
望んだモノを映していても、そのモノ自身ではないカナは、ホンモノには勝れない。
実物があるのにレプリカを選ぶ人間は、いないから。ニセモノはホンモノが現れた時点で意味をなくす。
価値をなくした代理品は捨てられる、だけ。
「兄様が危うくも国公立に合格した後、母様も父様も私に受験について言わなくなった。もういいと思ったんだろうね。誇れる息子は1人でいいって。
裕福だったとはいえ生活費を削っての学習費は、ただの重りになって…前に2人が話してるところを聞いちゃったんだ。
私は大学に行かなくてもいい。将来に何の目標も立てられない奴を行かせる必要はない。モラトリアムなんて無駄だから、だってさ」
大学。通うのに何の目標も掲げない人間が数多くいるキャンパス。
カナの進路なんて、将来なんて聞いた事もなかったが、そもそもそんなものなかったん、だろう。
自分がそう望まれているからという理由で、それに身を委ねたにすぎなかったはずだ。
望まれる事を望むしかない、望みに依存する事しかできない以上、自身の将来など破綻しきっている。
望まれている事以外をしようのないカナが、他人の逢川要の虚像に縛られるしかないカナが自分の夢など実現できるわけもない…。
いや、ただ望まれている事が夢だったのかもしれないのに、その結末はあまりにも悲惨だ。
既にもう行き詰まって、どうしようもない話であるにも関わらず、まだカナの話は続く。

「兄様は出て行って、それの後彼女を作っちゃった。
いくら要領が悪くても、人付き合いが苦手でも、ちゃんと中身を見てくれる女っているんだね。
そうなると私って存在はむしろ邪魔でしょ？弟を女に仕立て上げて抱いてたなんて異常な経歴はマイナスにしかならない」
邪魔で、異常で…だから、そうしたのは自分の癖に、捨てた。
取り返しのつかない事をしておいて、そこまでしてカナを求めておいて、なかった事にしようとした…？
「姉様も、本当に奇跡のような偶然で、いい人を見つけたの。
可愛い可愛い、女の子って形容していいような小柄の子。私から見てもお世辞抜きで純粋無垢って感じでさ。家を出ていって、東京で2人で暮らしてるんだって。
戸籍上は無理でも、式はちゃんと挙げて幸せになった。だから、私も幸せになってって」
そんな台詞がカナの幸せを奪っているとは、なんて皮肉。
心あろうとなかろうと、その言葉はカナにとって死刑宣告だったに違いないのに。
カナの役割はこうして次々に消滅していって……いや、分かってる。分かってるんだ。
もう1人、カナを捨てた人物がいるなんて事は。
「そして、こーちゃんは」
あぁ、分かっているとも…。
救いのないほど、俺も加害者だという事ぐらいはさ。
「陽介君と親睦を深めていった。
陽介君は今年クラス替えをしてだから、ほんの2、3ヶ月かな？その間に私の立場を持ってっちゃうし…あれは結構ショックだったなー」
そういう割りには淡々と言葉を紡ぐカナ。
ここでもし叫んでくれたなら、泣いてくれたなら、俺は何かかける台詞があるはずなのに。

諦観しきったカナを見て、俺の方が追い込まれていく気がした。胸が圧迫される感覚に、息苦しさを覚える。
「昔から遊びに誘うのはこーちゃんの方だったのに、ここ最近はゴールデンウィークも音沙汰なしだしさ」
でも、とカナはさらに、さらに続ける。これ以上いらないほどの不遇が、まだ続いている。
「極めつけはあれだよね。相談、聞いてくれなかったってコト。覚えてるよね？昨日の話ぐらいは。
あれが無視できないほどには異常だったって、今なら分かるんじゃない？陽介君が死んで、親友という役割が私に戻ってきた今ならさ。
こーちゃんの言うところの何でも卒なくこなす何でも1人でできる僕こと逢川要が、相談があるっていったんだ。
今まで一度もそんな事は言わなかったし、言うようには思われてなかったからこそ、目に留まる程度の事態ではあったんじゃないかな？
それだけじゃあ足りないかなって思って、先にある約束を破棄させようとしたけど…駄目だったね」
カナが、他人の頼み事を断れないと俺が思っていて、実際鏡である以上はその通りであるはずのカナが、他人より自分を優先させようとした言葉に、俺は気づけなかった。
珍しい、程度の話ではない。今まであり得なかった事をやったというのに、そんな事すら俺は気づけなかった。事の重大さを見逃していた。…見えていなかった。
「だから、あの相談はわざと約束と被せたんだ」
「ど、どうやって？」
あの時店内にいて、俺達と離れていたはずのカナに、話の内容を知る事ができるはずないのに。
「…子供の頃ってさ、何か特別なモノに憧れたじゃない。見よう見まねで色んな”しゅぎょう”をしたよね。

こーちゃんじゃない、読唇術の練習やろうだなんて言い出したのは」
ずるりと、脳の記憶を無理やり引き出されるような感覚。
思い出されたのは、ひたすら唇の動きを見つめて、何を言ってるのか当てあった日々の名残。
ほらやっぱりこーちゃんに懐古の情はないよ。そう皮肉交じりに笑うカナ。
「だから…だから殺したのか？」
勝手な思い込みで逢川要を壊して、あるはずの要本来を殺しておきながら、無価値だと捨てた家族に復讐するために。…俺に復讐するために。
それはどうしようもなく正当に思える動機だ。その対象になっている俺さえが、カナの立場であれば、同じ事をしたであろうと思うほどに、当然だ。
恨ンデうらんでウラんで怨んでウランデ恨んで恨ンデ……これ以上ない理由だった。
けれど、違うと首を振った。
「それは違うよ。
どんな風に扱われようが、それは私が必要とされている証で、役割を終えて見向きもされなくなってもさ、それが代替物ってものなんだから。
どうしてかしらないけれど、私がそういう役回りである以上、そういう星の下に生まれてきた以上、世界においての私の立ち位置がそうである以上、その当然の結果に対して憤っても仕方ないじゃない。
無意識に私への依存性が薄れていく、なんていう理に従っているだけのこーちゃん達を何で恨まないといけないのさ」
少し拗ねたような声。そんな勘違いはしないでよという副声音。
逢川要を勘違いしてきたという俺にするにはあまりにも似つかわしくない仕草だった。

カナは、言う。酷い事をされたけど、惨い仕打ちではあったけど、けれどけれどけれど結局のところ――――、

「私は姉様を愛してるし、兄様も愛してる。母様も父様も好きだし、もちろんこーちゃんも大好きっ！」

心底愛おしそうに。真底狂おしそうに。

はにかむ姿にこっちが狂ってしまいそうなほどに。

「皆が遠のいていくのを見てるのってさ、祭が終わる時みたいな気分なんだ。

去年の学園祭覚えてる？夕暮れが過ぎた辺りから人気（ひとけ）が段々なくなって、次に出店を皆で閉めて、あっという間に物で埋め尽くされていた場所が空き地になるの。あんな感じ。

母様父様の教育熱が冷めて、姉様は幸せになって、兄様も彼女を作って、こーちゃんが親友を得て、私の演じていた役割が徐々に消滅していって、身支度が整ったというかね…ふと気づいたの。

あぁ、これで私のやる事は全て終わったんだから、もうがんばらなくていいんだって。お仕舞いにしていいんだって

……死んでもいいんだって。

皆が幸せのままで、私も開放されたんだから、休んでしまいたい。

皆の幻想を守って、私の頑張りも報われたんだから、眠ってしまいたい。そう思ったから。

本当は自分だけ死ぬつもりだったんだよ」

他人が見ている逢川要が私じゃなくてもよかったけど、虚像しか偽者しか見えていなくたって構わなかったけど、けど…やっぱり疲れたから。

疲れる、モノだから。疲弊しきっているのに、これからもただ何もしないまま行き続ければならないなんて、できないと思った故に。

幼い頃に遊んだ玩具が押入れの箱の中、ひたすら取り出されるのを待つようになんて、生きられない。

だから、死のうと思った。…そうしてカナは精神的に死んだ。
でも。でもでもでもでも…！
「でも、考えてみれば、私が死ぬ以上、こーちゃん達が生きてる必要なんてないって事に気づいたんだ」
そこにきて、狂ってしまった。
なまじ生きていたから、死んだ分、狂ってしまった。
「私にとってこれで物語が終わるのに、その後になっても舞台で役者が何かしらを演じているというのはおかしな話でしょ？」
心で死んで、体を殺すその狭間になら、鏡を辞める事ができた。
心が体を離れたことによって、行き詰まった状態から脱出できた。
自分の存在を蔑ろにできるその間だけ、なりふり構わず何でもできた。
「観客である私がいないんだからそんなモノに意味はない。別に殺す理由もなかったけど、殺さないでいる理由もなかった。
だから、必要ないなら殺しちゃおうと思っただけ」
ふと、ならばと思ってしまった。
全てが終わるのだから、ならば周りの皆だって生きている必要性はないなどと…。
もちろんカナにとってはの話であって、あまりに身勝手な理屈だろうけど、
これまで我を出せずにいたカナの場合はむしろ、我が侭だからこそ意味がある――――。
「あはっ、こんなの理由にすらならないよね？言っちゃえば単なる気まぐれ」
確かに理由にならない。確かに気まぐれだ。
そんな何でもない何もない圧倒的に意味のない動機にならない動機で殺されるぐらいなら、
恨まれて、憎まれて殺された方がマシだった。
ああ、何を考えてるんだ俺は。殺されたい、わけではないのに。
それでも、それでもそう思わずにはいられないほど、救いがない。

酷い事をされたから…恨んで、惨い仕打ちを受けたから…憎んで。
復讐で逆襲で、煮えたぎるほどの熱い感情に任せて、殺される方がよかった。
死ぬのなら、死んでしまうのなら、意味がある方が…いいから。
なのに。それなのに。
『そうだ皆殺してしまおう、あぁそれならいっそ、せっかくだから、これを機に、自分勝手なコトをやってみよう…』
気まぐれで。ふと思いついた程度の”ついで”で。
そんな最低な理由で死ぬのなんて、嫌だ。そんな最悪な動機で殺されるなんて、嫌だ。
無意味に無価値に無機質に無感情に…！
そんな無為で殺されるなんて、嫌だ。
それでも、皆殺された。
殺すだけでは役足らず、ぐちゃぐちゃにされた。
目を取られて、鼻を潰されて、耳を削がれて、顔を落とされて、胸を開かれて、腹を抉られて、手足を切られて…損壊し尽くされた。
その理由が今なら分かる。
あれは俺を驚かせるためだ。…怖がらせるためなのだ。
鏡を割った証明として、予想外の、予測不能の、俺の持つ逢川要像を逸脱するための不可避な動作。
それ以外に何もない。無意味で無価値な理由からさらに派生した無機質で無感情な理由（ついで）による行動。
くだらない、話だった。くだらなすぎて、許容できない。
皆を恨むあったはずの正当な理由は放棄しておきながら、どっちでもよかった程度の理由を採るなんて許せるわけがない。
人を殺すという、人の人生を壊すという非道を軽く行える、俺の知らないカナの存在が怖くて仕方なくて、
「ふざ、けるな…」
我慢できずに、
「ふっざけんな！んな事で人を殺すんじゃねぇ！…お前どうにかし

ちまったんだよ！！」
叫んでいた。
「……俺の知ってるカナはあんな事しねぇっ！！！」
それが、どうしようもないくらいの失言であるかなんて分かっているのに。
それに対するカナの答えなんて分かりきっているのに。
滑稽なくらい、俺は愚かにも未だ虚像に縋っている。
「”俺の知ってる”ね…。だからさぁ、それは、
こーちゃんがそう思いたい逢川要を見ていたにすぎないから
じゃない」

冷たい、突き放した声。相手を凍りつかせて麻痺させて、心臓を抉り出すような、声。
…分かっていたんだ。カナの話を聞いていた時から、遠まわしにしか言われていなかっただけで、そういう事だとは分かっていたはずだった。
それでも、はっきりと、直接的に言われてしまう事がこれほど身を突き刺すとは知らなかった。
そんな言葉がカナの口から出てくると信じたくなかったけど。けど、そんなちっぽけな希望は虚像（かがみ）と一緒に砕かれた。
……ああ、そうか。
カナは…俺の知っているカナは、人を傷つけるような事を言わなかったから、俺にとっての逢川要がニセモノだと思い知らされたから、だからこんなに胸が痛いのか。
「カナはさ…」
カナは、
「何でも卒なくこなして…」
「私は不器用で」

「強くて…」
「打たれ弱くて」
「いつも笑っていて…」
「泣き虫で泣き虫で」
「お人好しで…」
「怒るコトすらできない臆病者で」
「何事にも動じないで…」
「暗い所にも水中にも1人では居られないような怖がりで」
「頼りになって…」
「依存してるのは私の方だった。
…誰かに求められなければ生きてすらいけないんだから」
あぁ……、
ホントに…ホントウに……ずっとすれ違って、最初から間違って、カナじゃないカナを見ていたんだ。
何もかもが一方通行で、相手の想いは伝わっても、自分の意思は表せない。
それは、一体どんな気分だったのだろう？
全てがチグハグで、生きている限りどう足掻いても齟齬を生んでしまう自分の様を見て何を思っていたのだろう？
自分が表せないという事は世界と断絶されてるようなもので。自分の思い通りにならない自分なんてものは他人と同じで。
生きていないようなもので。
…それでも自分の存在を偽りに求めて生を得た。
ニセモノがあるのならホンモノがあって。レプリカがあるのならオリジナルがあって。
自分がいなければニセモノもレプリカも生まれなかったはずだから、自分は生きているのだと思えていた。
けれど、それも終わり。
ニセモノでレプリカである前に代替物だった逢川要の役割はもう果たされて、虚像にすらなれなくなった。

そこで、もう、疲れてしまったのだ。疲弊しきって何もできなくなっていた。
目的のない停滞ほど疲労するものはなく、在るだけで辛かった。
だから、死のうと思った。
皆が思わせた。…俺が思わせた。
もしも、俺達の誰か1人でもカナの異変に感づけば。
何故か前よりカナとの距離が開いてるという程度の事でも気づいていたら。
俺が、相談を持ちかけられたあの時に、分かっていれば。分かっていれば？

――――まさか、その姿が俺がカナを見る最後の機会になるとは思ってもみなかった。
もしもあの時、カナの相談を聞いていればあんな事にはならなかったかもしれない。

あは。あはははははははっ！くくっ、ぁはははは…はっっぁあ！！
…なんだ。結局、あのモノローグは冗談にもならない伏線そのものだったじゃないか。
俺は相談に乗る事なく、今はカナじゃない逢川要を見て――――、俺の知っているカナはもう見えてない。
今目の前で薄く笑っているカナは、今まで決して表に出てこれなかったホントウなのだから。
よーすけを殺して、永歌さんを殺して永次さんを殺して永助さんを殺して静菜さんを殺して、そのグロテスクな内側を曝けさせても平気な顔でいられる誰か。
俺をここまでまんまと誘(おび)き寄せて追い詰めた誰か。
血だらけのワンピースを着こなして血に濡れた手を気に止めもしず物静かにカナの本心を語る誰か。

皮肉にも皮肉すぎて皮肉しかないくらいに、それがカナの本来であるというのに、それを見て聞いて触れる度に俺のカナ像から遠ざかっていった。
何の意味もない理由と気まぐれで殺人を行えるほどに無機質で、自分の身に降りかかった事象に無感情なカナがホントウを吐露している。
……、……？
……。…あれ…？
…本心を…ホントウを？
語って、吐いている…？
「――――っぁ」
ああ、なんだ、そうなんだ。
…そう、なんだ。
何で、気づかなかったんだろう…。
あれが本心なら、アレはホントウじゃない。
ここにきて尚、カナは本心を隠している。最後の最後まで嘘を吐いている。
全く、お人好しもいいとこだ。
あぁ、それだけは、お人好しという点だけは俺はホントウを見れていたのかもしれない。
それはあまりにも俺の都合のいい解釈だけど、それでもやっと、1つだけ確かなモノをこの手に掴んだ気がしたから。
だから、こんな瀬戸際に遅すぎるけれど、本心を俺が言わせてやる。
出会ってずっと、嘘を吐かせてきた俺なんかではおこがましすぎるけど…それでも、
これは俺のちっぽけな償いだ。
「カナ…」
「ん？」

浅く、息を吸い込む。
「嘘…吐いてるだろ？」
失敗できない、後戻りできない台詞を覚悟と共に吐き出した。
「何を？」
「あんなくだらない気まぐれでお前は人殺しなんかしない」
その言葉を聞いたところでカナは表情１つ変えはしない。
「それはこーちゃんの思ってる逢川要の話だよ」
分かりきっていた返答。事前に用意された回答。
けれど、それは、
「嘘だ」
「嘘なんて吐いてない」
「吐いてる」
「吐いてない」
「吐いてる」「吐いてない」
「吐いてる」「吐いてない」
「吐いてる」「吐いてない」「吐いてる」「吐いてない」
「吐いてる」「吐いてない」「吐いてる」「吐いてない」「吐いてる」

「吐いてな――「吐いてる！！！」

びくりと。
びくりとカナの体が僅かに跳ね上がった。
「胸を張って愛してると誇れる永歌さんや永次さんをそんな理由で殺せるか！
殺す殺さないはどっちでもよかった？敬愛してたんだろう！？殺せない理由はあっても殺す理由はないじゃねぇか！」
どっちでもよかったなんてあり得ない。
今目の前にしているカナが言ったんだ。俺の知らない、鏡の向こうにいた逢川要が。

『私は姉様を愛してるし、兄様も愛してる。母様も父様も好きだし、もちろんこーちゃんも大好きっ！』
それだけは、偽ってほしくはなかった。隠してほしくなかった。
偽りしか見ていなかった俺なんかのちっぽけな、切望…。
馬鹿馬鹿しいほど身の程知らずのおこがましい願望だ。
愛する人間を殺すには、殺せない方に傾いているはずの天秤を反対側に傾けるには、それ以上の想いがなければいけないから。
理由がないなんて、気まぐれなんて嘘なのだ。

「殺す必要のまるでなかった皆を殺したのはっ！カナにそうしたい理由があったからだ！！」

ぎりりっと歯を噛み締める音がカナから響いた。
俯いた陰りで表情が見えない。
垂れた前髪が揺れて、華奢な体が震えている。脆い身が壊れそうなほど震えている。
「…昨日の晩」
ぽつりと口から声が漏れた。
「こーちゃんが私をもう必要としてないってはっきりと分かって、だからかな？」
嘆息。息が抜けていく時間が随分と長く感じられる。
「その夜ベッドに入って、……何故か、すごく哀しくなった。寂しくなった。切なくなった。怖くて怖くてどうしようもなくなったんだよ。
それまでは何ともなかったのに、こーちゃんの無関心ぶりにさ、身に染みて気づかされた。このまま死んだら、私は完全に忘れ去られるって。
嘘の私しか知られずに死ぬ事になるって分かっていたけど、けど、そんな私すら数年後には忘却されていくんだって、思い知らされた。
私の役割がホントウに上書きされるってコトはね、こーちゃん…

つまり思い出も塗り潰されるってコトなんだよ。
もしも10年後、こーちゃんが何かのきっかけで親友を思い出す時、その脳裏に浮かぶのは私じゃなくて陽介君だ。姉様の思い出す彼女はホントウであるあの娘(こ)で、兄様もホントウの彼女を思い浮かべるんだろうね。
そこに私はいない。記憶の中にすら、思い出の中にすらいなくなる。思い出されるコトもなくなってしまう。
1人で死んで、何もなかったかのように消えてしまう。私の存在が本当の本当になくなってしまう。ホントウは、そんなコト分かってた、はずなのに…。
…それが急に、怖くなった。どうしても嫌になってたんだよ」
怖いに決まってるとその顔が語っている。
嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌と悲鳴を漏らしている。
「だから…皆一緒に…」
一緒に、心中。
忘れられるのが、酷く怖くて。
皆が自分を完全に忘却する前に、生命(とき)を止めてしまおうと。
自分を覚えている内に、永久に保存してしまおうと。
彼岸まで一緒に持って行こうとした。
と、いきなり、
「姉様、兄様、父様母様、こーちゃん、兄様母様こーちゃん、姉様姉様父様兄様、こーちゃんこーちゃんこーちゃん、こーちゃん……っ！！！」
カナが叫んだ。
大声で、悲痛の混じったか細い声で、訴えるように、自分の存在を誇示するように、叫んだ。
泣きそうな、顔、だった。
「……この声も、いずれ聞こえなくなるん、だよ…？」
消え入りそうな、呟き。精一杯の、嘆き。
それすらあまりに儚すぎて。

初めて聞くカナの待遇。
初めて聞くカナの悩み。
初めて聞くカナの弱音。
初めて聞くカナの本音。
虐待されていたなんて初めて知った。
あんなに苦しんでいる姿を初めて見た。
哀しいなんて、寂しいなんて、切ないなんて初めて聞いた。
狂おしい本音に初めて触れた。

――――初めてが、多すぎて。
あんなに近かったのに、こんなにも遠かった。

「…だから、もう終わり。終幕、終演、終焉、終点、終着、最終回」
波打っていた感情は静まり、体の震えはぴたりと止んだ。表情は何を考えているのか分からない、無機質で無表情に戻った。
ゆっくりと足を踏み出す。
これでお話も終わりだからと。
これで物語も終わりだからと。
『私も死ぬからこーちゃんも死んで？』
そんな声が聞こえる。
でも、
ごめん、カナ。
俺、死にたくないんだ。
生きて、いたいんだ。
まだ上半身を立てて座っているような状態だった俺は、使える左腕と両足に力を入れて、地面についていた尻を持ち上げた。
今度こそ失敗せずに立ち上り、そのまま不意を突く形で近づいてきたカナに全体重をかけて体当たりする。カナの細い体は渾身の一撃に耐えられず床に転がった。
間髪入れず、そのままカナの上に馬乗りになり、躊躇しそうにな

る手を無理やり伸ばして首を絞める。
細い、喉仏もまるで出ていない首を、折れそうなほど力を込めて絞める。
殺すために。カナを殺すために。
カナを止めるために。
…自分は生き残りたいという劣情で以ってして、殺人を犯す。
「…ぁ……」
嗚咽のように、カナの口から音が漏れた。
息ができないせいで、言葉すら満足に発せない。
そんな状況なのに、自分が殺されそうだという瀬戸際なのに、カナは興味なさ気に俺を見ている。
「……ぅ」
その唇が微かに動いた。
嗚咽ではなく、何か台詞を言おうとしている…？
「え？」
何を言ってるのだと疑問を口にした瞬間、ただでさえ痛かった右腕に更なる激痛が走った。
「ぐぅぅぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
目をやると、カナの左手が折れた二の腕を握り潰し、折れた箇所をぐきぐきと揉むようにして骨を苛めている。
酷く、冷静な対処。
手元が緩んだ所で、カナは言い損ねた台詞を淡々と放つ。
「そういうプレイはさ、兄様とやり飽きてるの」
『玩具』――――『モノは大切に使わないとっていつも言ってるのに』
あぁ、畜生！そういうことか！
そういう…役割だったのか！
首を絞める事すらできない以上、俺にはもう逃げる以外の選択肢は残されていない。
まだ床に伏せているカナを思い切り横に転がし、その隙に全速力

で走る。向かう先は割れたガラス窓だ。あそこなら窓の鍵を開ける必要も、スライドさせる必要もない。
サッシに手をかけた時、残っていた破片でいくらか手の平が切れたが、そんな事を気にしている余裕はなかった。
偶然にも大幅に時間を短縮する事ができた逃亡動作。
けれど、屋根に足が着いた、と思った瞬間、その屋根がずるりと滑った。
「あっ…？」
バランスを崩して、前めりにこける。
ごろんとでんぐり返しのように、斜めに傾いた屋根を意に背いて転げ落ちていく際、窓の方に向いた視界が、その原因を捉えた。
行方不明だった永次さんの首。
ここに来て…ここまで来てっ！
文字通り潰されて厚みが半分ほどなくなった目なし鼻なし耳なしの顔が窓の下、屋根の上に置かれていた。
俺が大部屋に入ってそのまますぐ窓から逃げれないようにするために、一番確立の高いドアから一直線のあの位置に置いていた…？
しかし、そんな事を悠々と考え続けていられる状況ではない。
踏ん張って何とか勢い殺すそうとするものの、まるでうまくいかないまま屋根の終わりはもうそこまで迫っていた。努力虚しく空中に放り出される。
「っ…っっ！！」
運動神経が良くもない俺は猫のようにとはいかず、それでも何とか足の方から落ちる事だけには成功した。
無様に芝生を転がって、あちらこちらぶつけて擦り剥いて、やっと止まる。
草が口に入って、芝生を抉った顎が土に塗(まみ)れていた。
それでも、生きている。
それでも、あの悪夢の家から出れる事ができた。
…脱出、できた！

ここは閉鎖的な壁の外なのだ。後はとにかく走れば、逃げ切るのは容易い！
足に力を入れて、立ち、
……。
……、…。
「…ぅ……ぁ……」
……、……。
……、……。
「ぅうぁ…ぁ……あぁ……」
……、……、……。
……。……、……嘘、だろ。
「うわぁあああああああぁぁあああぁぁあああぁぁぁあああああああ！！！！」
足に力が入らない。
いや、両足がぐにりと曲がって体を支える意義を成していない。
つまり、
完全に、折れている。
こんな時に、こんな時にこんな時にこんな時に！
…ボフンと後で音がした。
振り向けば、そこには難なく卒なく2階から飛び降りてきたカナが――――いる。
「ふぅっんぐ！ふぅう、んんぐぅ！！」
手を使って前に進もうとするけれど、左腕だけでは足掻きにもならない。
爪の間に土が挟まるその不快さなど、今や気にする時間すら与えられていない。
悪足掻きにしかならない左腕と胴体と顎を使った匍匐（ほふく）前進は悲しいほど進まない。
そうこうしている内に、カナは俺と同じく芝生に転がっていた物を拾い上げていた。

血だらけの、金属バット。
何の迷いもなく、何の躊躇いもなく、カナが俺に向かってくる。
俺が選らんで今は血飛沫を浴びた白いワンピースを着て。
姉か兄にプレゼントされたのであろう薄いピンクのルージュをして。
肩口までの髪をそよそよとなびかせて。
もはや女にしか見えないその姿を以ってして、
――――哀しそうな、寂しそうな、切なそうな顔をして。
ゴン。
標的を確かめるように軽く一打後頭部にバットをぶつけた。
「ごめんね……こーちゃん」
――――初めての我が侭です。
お願いこーちゃん、一緒(わすれないで)に死んで。

■□

「平成21年5月9日…本件、以後称して涙川(ながかわ)連続殺人事件は起こりました。
えー、被害者は聖林高校2年生の辰田幸平と同じく大塚陽介、及び容疑者の家族である逢川永助・静菜夫妻、姉の永歌に兄の永次。容疑者は逢川家の次男で、再婚した静菜の連れ子です。
動機は、容疑者への性的虐待への復讐……物的証拠として兄・永次の使っていたと思われる机の引き出しから、女性ホルモン剤が複数発見され、購入の明細も残っていました。注射痕がある事からそれが容疑者に使用されていた事は間違いありません。
また、現場2階の容疑者・被害者ら自室に虐待時に撮られたと思われる写真が多数見つかっており、姉・兄の虐待関与は決定的です。両親はそれを黙認、あるいは隠匿していたと考えられ、幸平と陽介

も性的虐待に参加していたのではないかと思われます。
陽介は借りアパート内ベッドの上で殺され、幸平は逢川家の庭で殺された後、2階容疑者自室に運ばれたと思われます。永助は2階書斎、静菜は1階和室、姉・兄は幸平と同様の自室にて殺害され、幸平を除く全員が死後体を酷く損傷していました。
6人を殺害後容疑者は2階自室に戻って、自らのベッドにて手首を切り自殺を図っており、事件発覚後に警官が発見した時には既に数時間が経過した後で――――」

Please, please, call me...! ―side A―

[redacted]

音が鳴る鳴る響いてる。
それをずっと待っていて、けれど私には遠すぎて。
幸せなほどの呼び出しに、心は蕩(とろ)けてしまいそう。
あぁ、うん、待って、すぐ開ける。
重たい一歩を踏み出す度に、微かに脳裏を想い出が過ぎていく。
それは二度と戻らない幸せすぎる日々の名残。
決して広くはない家で知恵を絞ったかくれんぼ。
縁日で貰ったサワガニを熱帯魚と一緒にしたら怒られて。
塀の上を歩いていたら親分猫に落とされた。
冗談でした口紅を褒めてもらった幼き日。
過ぎた日々は儚く消えて、抵抗むなしく零れ落ちていく。
下校道で手に一杯のテントウムシを包み込み。
飽きもせずボールを当て合った運動場。
朝早くシートを広げた劇場前で熱いコーヒーが胃に染みて。
意味も分からず抱きしめられて2人で眠った夜の温もり。
ずっとそんな毎日が続くと信じていた夢の跡。
それをこれ以上、なくす前に。
何もかもがなかった事になる前に。
大切な宝物を潰れるほど抱きしめて、私の最後の悪足掻き。
酷く狭まった世界の中で、全てがぼやける光の中で、ゆっくりと、けれど急かされるように足を進める扉の前。
想い出ばかりが頭を満たして、切望ばかりが胸を締め付けて、
苦しくて苦しくて、泣きそうになるけれど。
正真正銘これが最後の頑張りだから。

私のために嘘を吐いて、知られたくない嘆きは包み隠して。
それでも望み（みんな）は手に入れよう。
初めての我が侭を、しよう。

――――だから、罪の扉を開いた。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■
■■■■■■■■■■■■■■■

Please, please, call me…! ―side A―（後

これは、”あなたが要る”の言葉だけで、生きていけると思えた少女のお話。

P．S．『雰囲気をぶち壊すため、後で書かれたあとがき』

夏ホラー参加作品なのに5月の話だったこの小説は、場違いだったかなぁなどと今思ってみたりします。
正確には２００９年5月7、8、9日の話でゴールデンウィーク明け数日後の物語なのですが、やっぱり夏は完全に無視してますよね。
猟奇的と性倒錯の要素が混ざってはいるものの、しかしこれがホラーなのかと私自身疑問に思っています。
人を怖がらせる話＝ホラーということで外れてはいないと思うのですが、最終的に切ない話になってしまいました。
これは間違いなく要のせいで、あの子が私の思った以上にお人好しだったということが書いてみてよく分かりました。
プロット製作時、まだ名前もなかった彼女に『物語の”要”だから』と仮につけた識別記号がそのまま名前になったわけなのですが、こ

れが偶然にもうまくいっていて、『”愛してる＝あなたが要る”の言葉だけで、生きていけると思えた少女のお話。』という小説の主題にも合った名前でした。
こういう物語でなければ主役に、物語の要になれなかったというのも皮肉なのでしょうが、けれど私はこの物語をそれほど悲観してません。
作者ですしね。
それに実のところ、この物語には幾つかの謎が残されています。
矛盾点やら触れられていない点やらに気づいたらたぶんそこ。
もし、そんな謎を見つけたら想像を膨らませていただけたら幸いです。
もしかしたら、書かれているモノとは違う別の何かを見つけられるかもしれません。
とか無責任なことを言ってますが、あまり鵜呑みにはしないでくださいね。

では・・・、
『この小説で主張したかったことはただ1つ！　要は　お人好しで　可愛い』
などとあとがきで書こうと思ったものの空気を読んでやっぱりやめた作者の出張あとがきでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2560k/

罪扉 -Irreplaceable replacement-

2011年7月30日03時20分発行